

# THE RAY

\*017>2013.05

TAKE FREE!

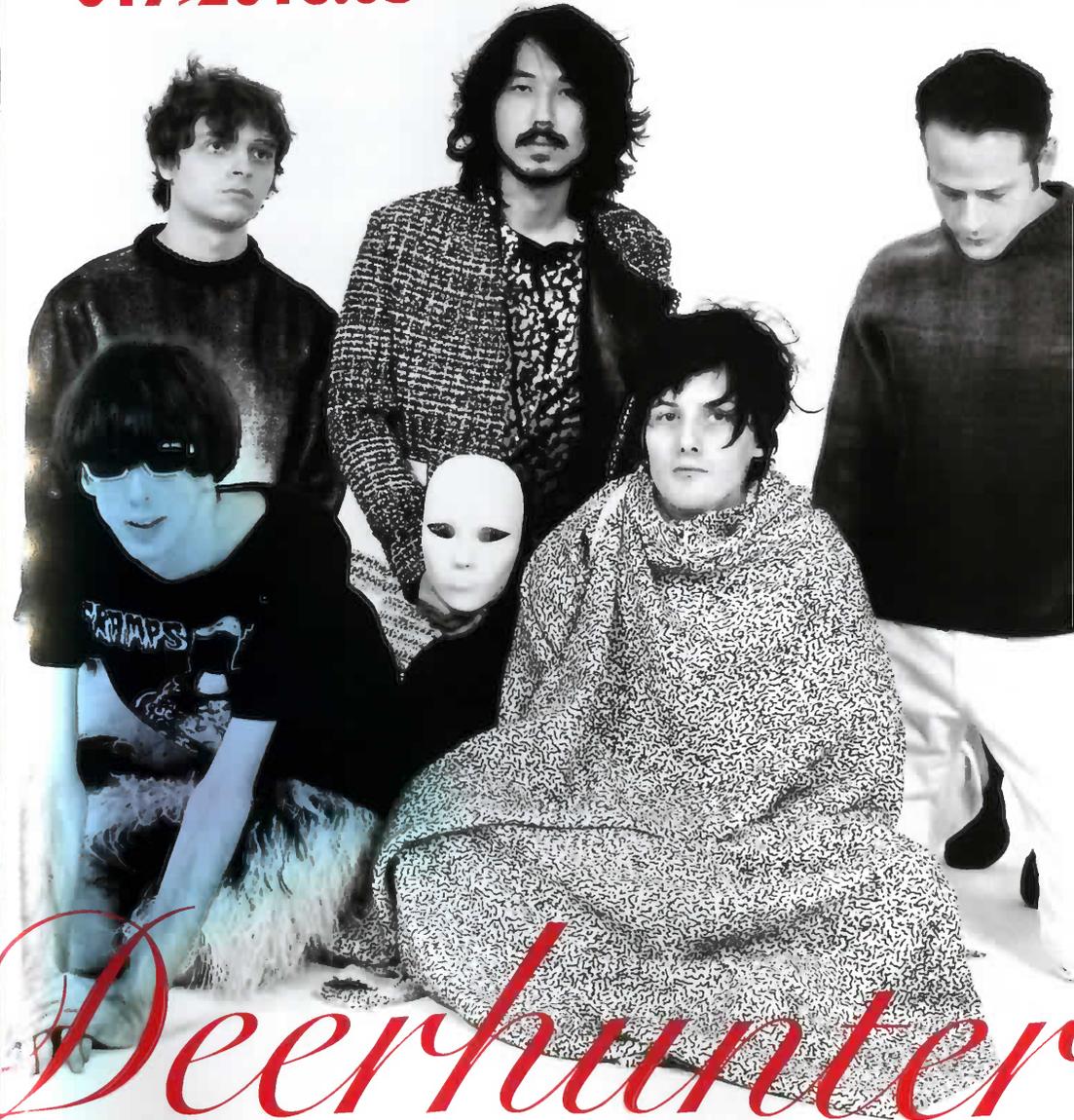
## Baths

WAVES GODSPEED YOU! BLACK EMPEROR CO LA  
KURT VILE SUN KIL MOON & THE ALBUM LEAF FEMMINIELLI

# THE RAY

\*017>2013.05

TAKE FREE!



## Deerhunter

PHOENIX THE PASTELS THE NATIONAL COLD CAVE  
FRENCH FILMS GRIZZLY BEAR HOW TO DRESS WELL



— あなたとジミー・ラヴェルのコラボレーションには少なからず驚きましたが、実はお二人は古くからの友人同士だったそうですね。まずは、知り合ったきっかけから教えてください。

マーク・コザレック：2000年にサン・フランシスコでジミーに出会ったんだよ。トリステザをやっていた頃だね。彼のことは長い間知っていたけど、お互いのことを深く知るようになったのは、今回のアルバムを作るようになってからだったな。

— ジミーのキャリアやジ・アルバム・リーフにはどのような印象を持ってましたか？

マーク：それは今さらここで説明するまでもないことだろうね。そうでなかったら、今回の共同作業は行われていないはずさ(笑)。

— 今回のコラボレーションをジミーに持ちかけたのはあなただそうですね。2011年9月11日に始めたそうですが、そのタイミングで始めた理由を教えてください。

マーク：サン・ルイス・オビスポに、アナ・ヴィドヴィチ(クローア出身のクラシック・ギター奏者)のコンサートを見に行った日だったということしか覚えていないよ。ジミーがライブで演奏しているのを見かけて、彼に接触したのが9

月のその日だったんだ。

— 『PERILS FROM THE SEA』のリリースまでに、あなたにはサン・キル・ムーン名義で『AMONG THE LEAVES』と、ソロとして『LIKE RATS』を発表していますが、それらの作品と今作は並行しての作業となったのですか？

マーク：そうだね、すべてのレコードは並行して作られたんだ。ほくは1つのプロジェクトだけに打ち掛かることはほとんどないんだよ。

— 今作では、音楽はジミー、作詞/ヴォーカルがあなたという完璧な役割分担がなされていますね。個々の活動ではお二人ともすべてのパートを担っていますが、今回明確な役割分担を設けたのはなぜですか？

マーク：それですべてがうまく進んだからさ。ジミーはほくが完璧だと思っ音楽を送ってくれた。彼が音楽を担当することに不満はなかったよ。そして、彼はほくがヴォーカルを担当することに何の不満も出さなかった。それで成立したんだよ。

— アルバム全編を通し、ジミーのアプローチは近年のアルバム・リーフのそれとは異なり、エレクトロ全体で非常にミニマルです。このテクスチャーはジミーから自然と生まれたのでしょうか？ それとお二人の意思疎通の結果で

# BEADILY #04 SUN KIL MOON & THE ALBUM LEAF

INTERVIEW & TEXT BY SO KATAOKA, TRANSLATION BY KARI KUWAMURA

マーク・コザレックとジミー・ラヴェルが共同作業でアルバムを完成させたと聞いて、どんな音を想像するだろう？ おそらくだが、多くの予想を良い意味で裏切る作品となっているのではないだろうか？

ジミーの提供したトラックはミニマルなエレクトロニカが基調。その必要最小限の音に乗せて、マークは歌う。普段の彼とは明らかに異なるムードで、どこか楽しげに、嗜れやかに、微笑とともに、歌う。惜むらくはユニット名かな？ もっと2人の本気度がしっかり伝わる新名義での活動継続を切望します！

すか？

マーク：音楽はすべてジミーが担当したんだ。時々、いくつかのパートを延ばすためのリクエストを出したりはしたけどね。だから、音楽に関しては、すべて自然とジミーから出されたものだよ。ほくがヴォーカルを入れるスペースを確保しやすいように、楽曲をミニマルにまとめることは意図的だったと思うけどね。

— 他者の楽曲に詞を乗せ、歌うという経験はどのようなものでしたか？ 言い換えれば、顔の見えない不特定多数の“誰か”に向けてではなく、まず第一に才能ある近しい人物に作品を提示するという行為は、あなたの創造性を大いに刺激したのではないのでしょうか？ 実際、今作での詞作やヴォーカルには、目を見張るものがあります。

マーク：ほくのやり方はクラシック・ギターを使って楽曲を表現することだよ。今回のような、自分では思いつかないようなビートとサウンドに歌を添えるという作業が新鮮で楽しかったことは間違いないだろうね。

— 最初に完成した曲はオープニングの「WHAT HAPPENED TO MY BROTHER」だそうですね。この曲からフル・アルバムの制作を決意したそうですが、ジミーからこの曲が届いた時、あなたはどのようなインスピレーションを受けましたか？

マーク：この曲を聞いた1時間後には詩を書き始めていたよ。それほど率直にインスピレーションを受けたわけだけど、それがどんなものだったか言葉で説明することは不可能だろうね。

— 基本的にミニマルな曲が多い中、「BABY IN DEATH CAN I REST NEXT TO YOUR GRAVE」や「SOMEHOW THE WONDER OF LIFE PREVAILS」のような複雑な展開の曲は、何度かのやり取りを経て完成したと思うのですが、そのやり取りはホスタル・サービスではなく、FTPかメールで行ったんですよね。テクノロジーの進歩で作業も随分スムーズに進んだのでは？(笑)

マーク：うん、その通りだよ。ほく達は最小限のコミュニケーションですべての曲を仕上げたんだ。ただ、このやり

方はジミーとほくにだけ適していて、どのアーティストにも真似できるものではないと思うよ。

— 「SOMEHOW THE WONDER OF LIFE PREVAILS」にはピーター・プロデリックがストリングスで参加していますね。彼は近年評価が高まっているアーティストですが、参加した経緯を教えてください。彼も友人なののでしょうか？

マーク：個人的には、彼のことをよく知らないんだ。おそらく彼はジミーの友人だろうね。

— 『PERILS FROM THE SEA』や『LIKE RATS』は他者からのインスピレーションを発展させた作品だと言えると思うのですが、今後コラボレーションしてみたいアーティストはいますか？ ピーター・プロデリックは相性がよさそうですね。以前インタビューであなたが敬愛していると言っていたアイザック・ブロックはいかがでしょう？

マーク：ピーターの音楽のことはあまりよく知らないからね……。コラボしてみたいアーティストはたくさんいるけど、あえて言わないでおくよ。言ってしまうと叶わなくなってしまいそうだからね！(笑)

— とところで、サン・キル・ムーン & アルバム・リーフとしてライブ活動は予定していますか？ ぜひ来日も実現させてほしいんですが！

マーク：今のところ予定はないけど、日本にはぜひまた行きたいと思っているよ！ ほくもジミーも日本が大好きだからね。

— 「CEILING GAZING」や「CAROLINE」のような美しい曲を聴いていると、サン・キル・ムーン & アルバム・リーフの今後の活動を期待せずにはいられません。今後もこのプロジェクトは継続するのでしょうか？

マーク：ほくはそうしたいと思っているよ。ジミーがもっと音楽を送ってくれば、ほくはいつでも歌うつもりさ！

PERILS FROM THE SEA  
PROD. BY SUN KIL MOON & THE ALBUM LEAF  
2013.5.2 out

